

伝法地区まちづくりに関する調査（アンケート）結果書

発行 令和7年12月1日 伝法地区まちづくり協議会・伝法地区連合町内会・富士市

調査概要

期間：令和7年2月1日～7年3月14日 対象：伝法地区在住の中学生以上の住民（10,859人）

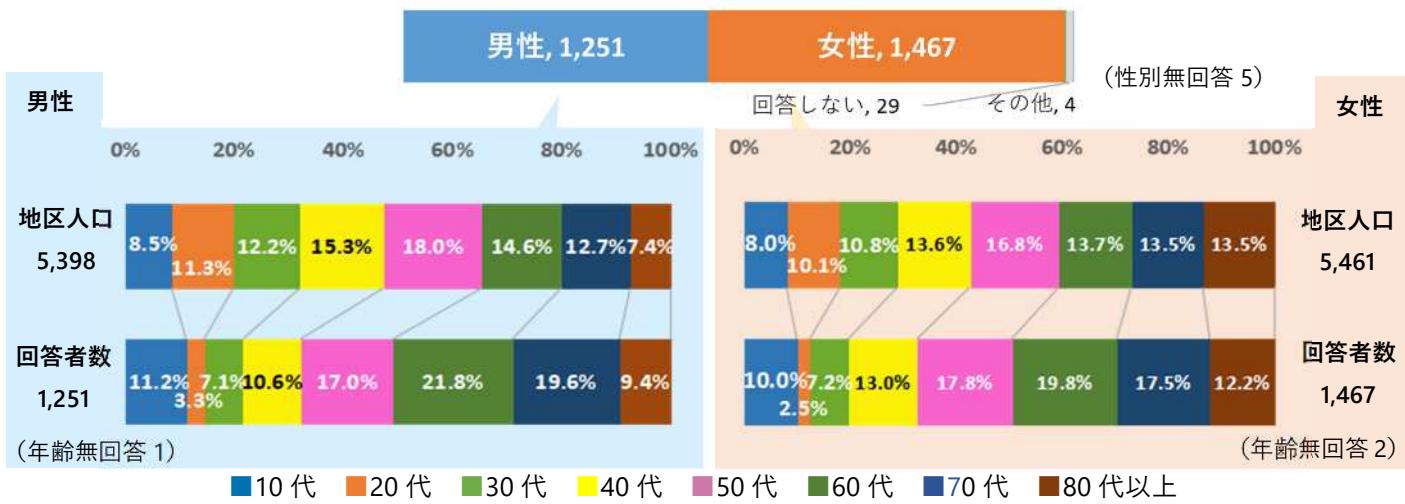
配布方法：地区配布（中学生は学校で実施） 回答方法：紙／オンライン 有効回答数：2,756人

伝法地区では、地区の将来を見据え、各種団体の連携のもと地区的課題解決に向け効果的・効率的なまちづくり活動を推進していくため、住民ニーズを正確に把握する「まちづくりに関する調査（アンケート）」を実施しました。多くの方にご回答・ご協力をいただきありがとうございました。「調査結果（速報値）」はすでに発行しましたが、この度、年代別に回答を分析した結果を発行いたします。調査結果は、令和9年度から始まる次期地区まちづくり行動計画の策定の基礎資料として、今後のまちづくり活動の参考とさせていただきます。

回答者概要

(1)性別 (2)年齢 (2024年4月1日現在)

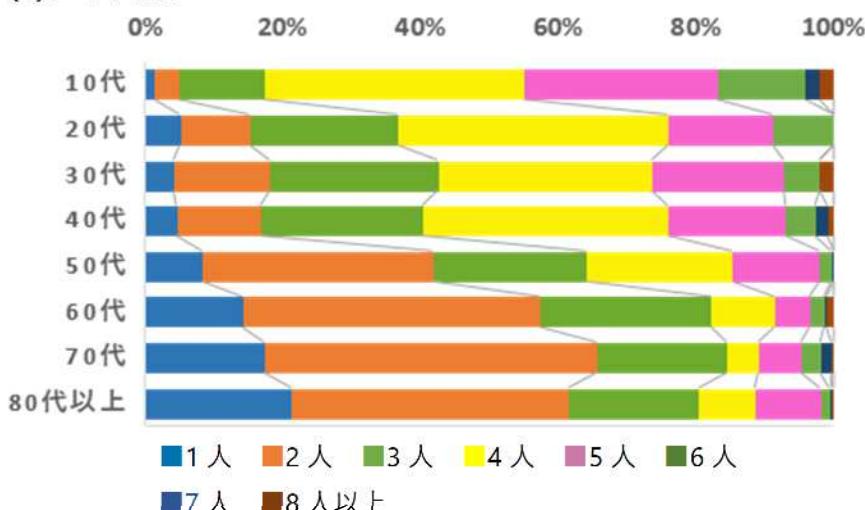
※住民基本台帳の集計も12才以上を計上しています



住民基本台帳と比較すると、60代・70代のアンケート回答者の割合が高く、特に60代についてはその差が男女とも顕著です。一方、20代や30代などの若年層では、回答者の割合が低くなっています。そのため、集計結果には高齢層の意見が相対的に多く反映されている可能性があります。

これより以下の設問は、無回答を除いた数値で算出しています。また年代別で表示しているグラフは、年齢無回答を除いた数値で算出しています。

(3)世帯人数



世帯人数の分布を年代別にみると、10代～40代では「3人世帯」と「4人世帯」の割合が高く、半数以上を占めています。

50代以降から「1人世帯」と「2人世帯」の占める割合が増加し始め、高齢になるほど比率が高くなります。70代以上では「1人世帯」「2人世帯」だけで6割近くを占めています。

若年層～中年層では家族構成が多様である一方、高齢層では一人暮らし、もしくは夫婦のみの世帯が増えていることがうかがえます。

(4)町内会

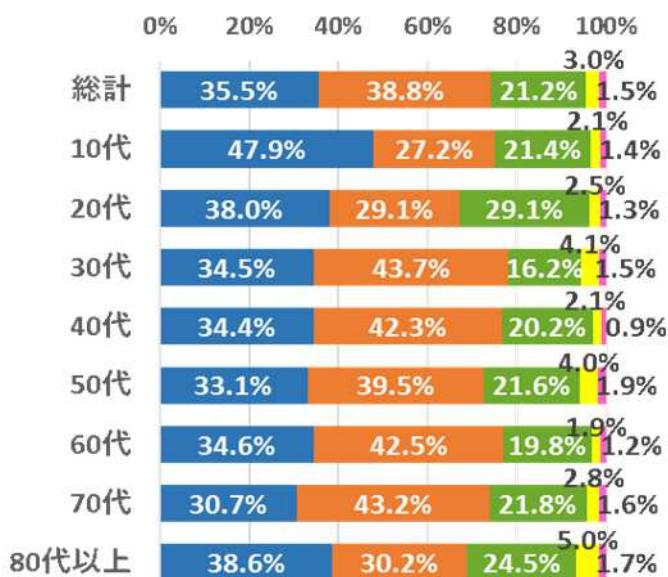


住民基本台帳と比較すると、一部の町内会でやや差が見られるものの、全体として町内会ごとの構成に極端な偏在は認められません。町内会間の回答率の差が比較的少なく、地域全体の実態がバランスよく反映されているといえます。

地区への印象

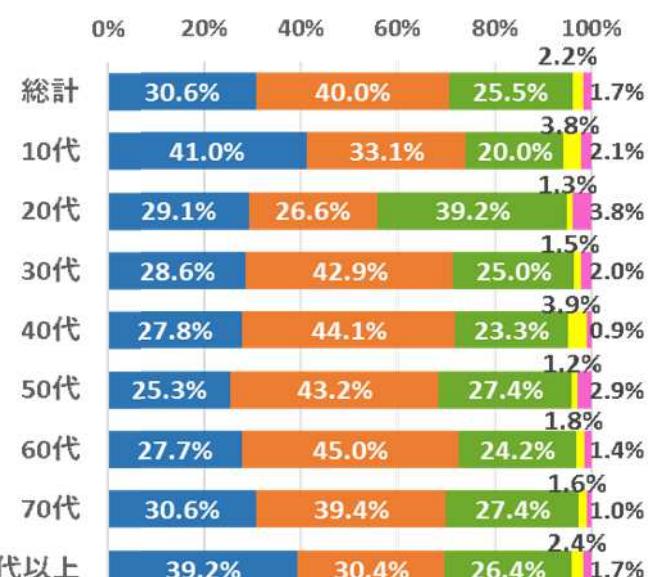
(5)あなたのお住まいの地区は住みやすいですか？

(1つ選択)



(6)あなたはお住まいの地区が好きですか？

(1つ選択)



■住みやすい ■どちらかといえば住みやすい

■よいとも悪いとも言えない

■どちらかといえば住みにくい ■住みにくい

■好き ■どちらかといえば好き

■どちらともいえない

■どちらかといえば好きではない ■好きではない

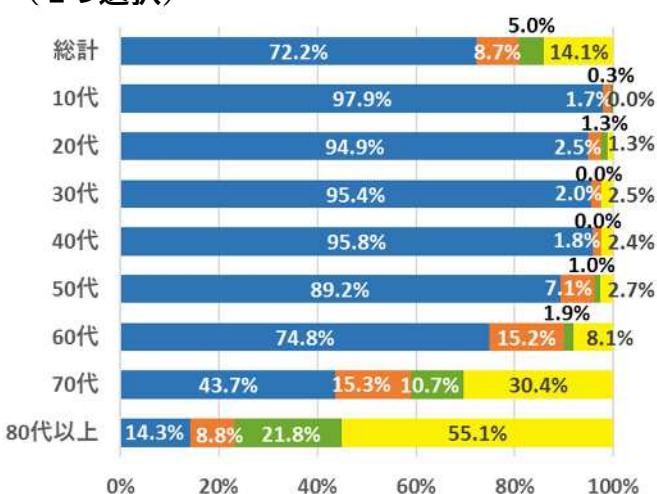
伝法地区の住みやすさについては、全体として「住みやすい」「どちらかといえば住みやすい」の合計が高く、「住みにくい」との回答は非常に少ないため、住環境への満足度は高いと考えられます。伝法地区への好感については、「好き」「どちらかといえば好き」の肯定的な回答が全年代で多く見られます。伝法地区は全体として住みやすく、住民から好かれている地域であることがうかがえます。

一方、20代は他の年代に比べて、中立的回答が目立ちます。他の年代と比較してライフスタイルの変化や多様性が大きい世代であり、住んでいる地区への関心が低くなっていることが考えられます。

インターネットの利用状況 / 興味

(7)あなたはインターネットを利用していますか

(1つ選択)

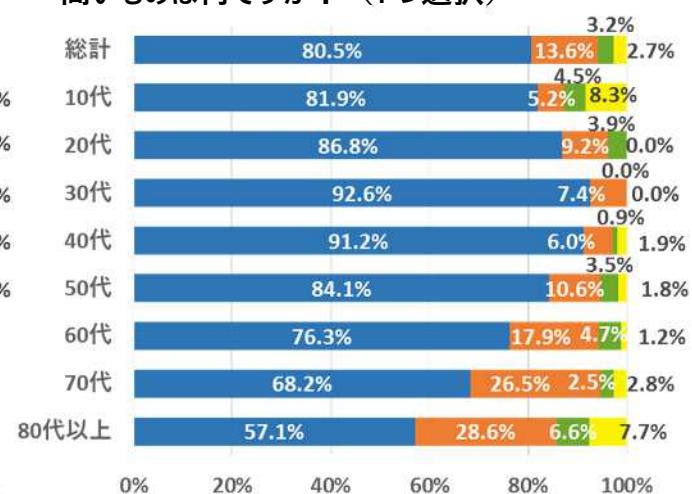


■利用している ■あまり利用していない

■利用していない ■利用していない（利用方法がわからない）

(7)で「利用している」「あまり利用していない」と回答した方

(8)インターネットを利用するときに特に使用頻度が高いものは何ですか？(1つ選択)



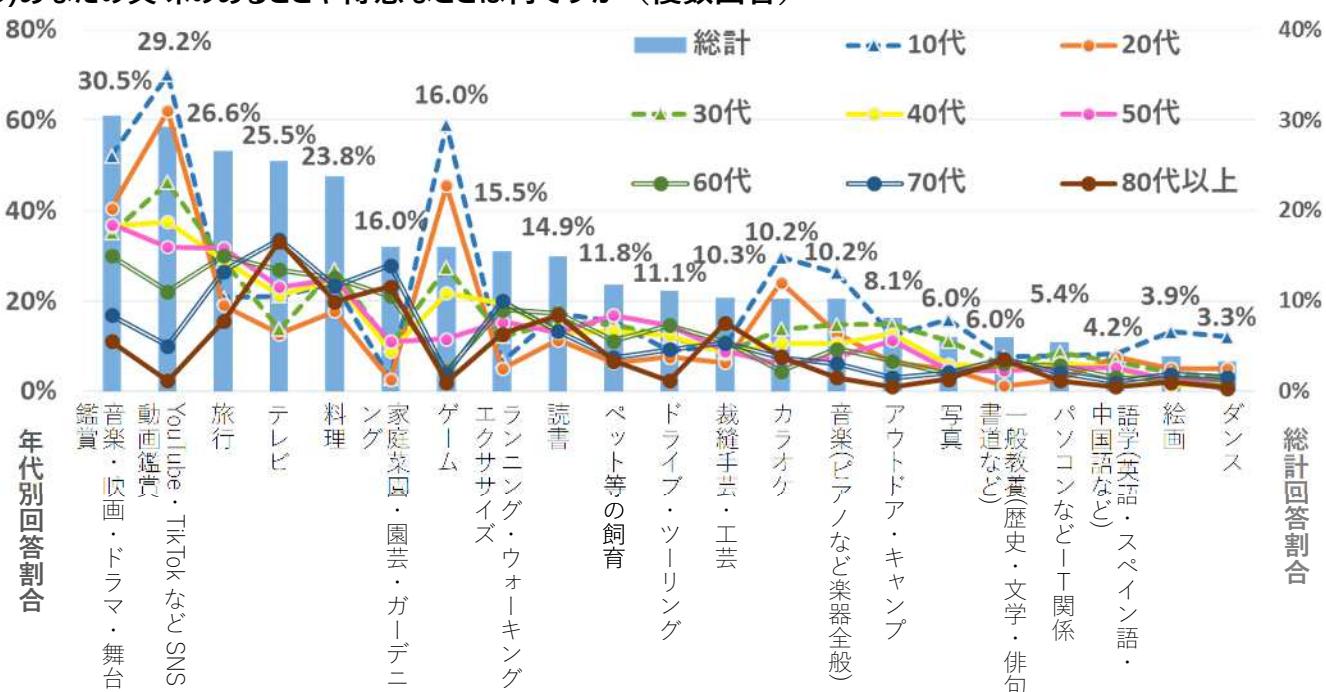
■スマートフォン ■パソコン

■タブレット ■テレビ・ゲーム機

インターネットの利用状況については、若年層ほど利用率が顕著に高まり、高齢層ほど利用率が低い傾向が明確に見られます。「利用していない（利用方法がわからない）」と回答する割合も高齢層で目立ちます。

また、インターネットを利用するときに使用頻度が高いものは、全世代を通して「スマートフォン」が主流ですが、年代が上がるほど「パソコン」利用の割合がやや高まります。

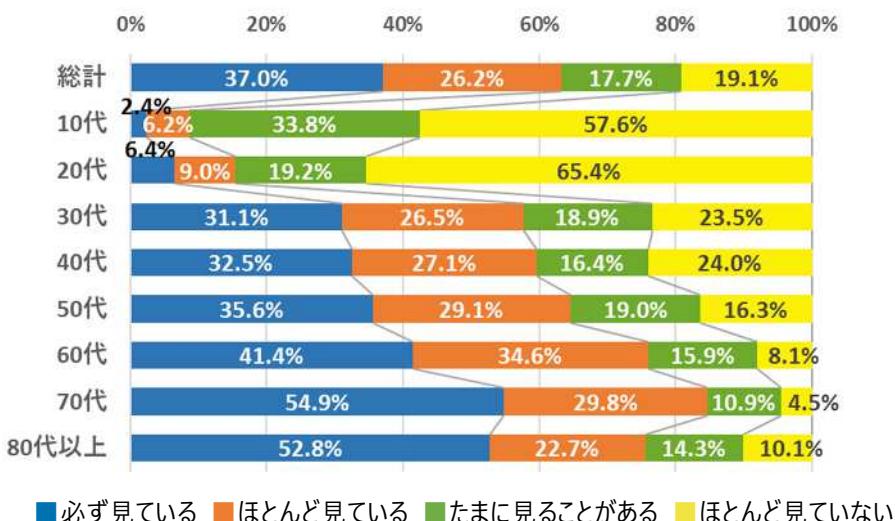
(9)あなたの興味のあることや得意なことは何ですか（複数回答）



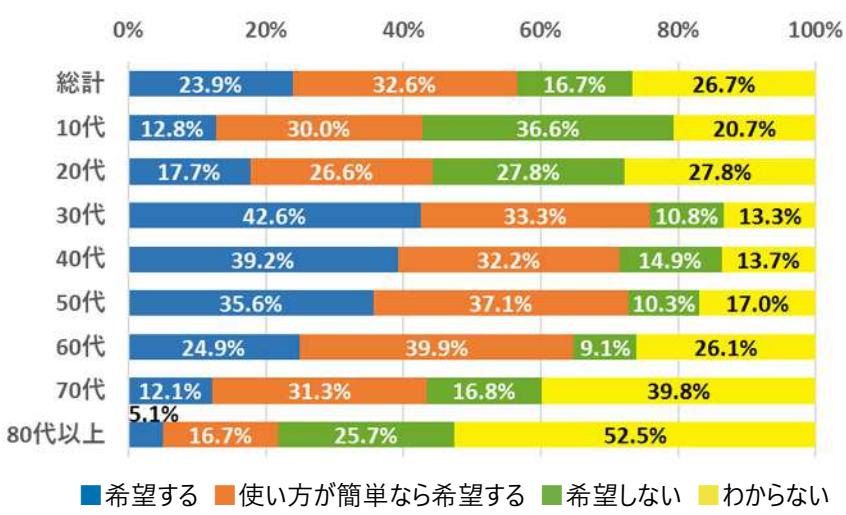
10~20代では「YouTube・TikTokなどSNS動画鑑賞」や「ゲーム」が突出して高く、30~60代は「音楽・映画・ドラマ・舞台鑑賞」や「YouTube・TikTokなどSNS動画鑑賞」の割合が高いほかに「旅行」「料理」「テレビ」などの割合が上昇しています。70~80代以上では、「テレビ」が最も多く、「旅行」「家庭菜園・園芸・ガーデニング」「料理」といった活動が上位に挙がっており、各世代ともエンタメ要素の強い項目や生活に関連した活動の割合が高い傾向にあります。

まちづくり活動の情報

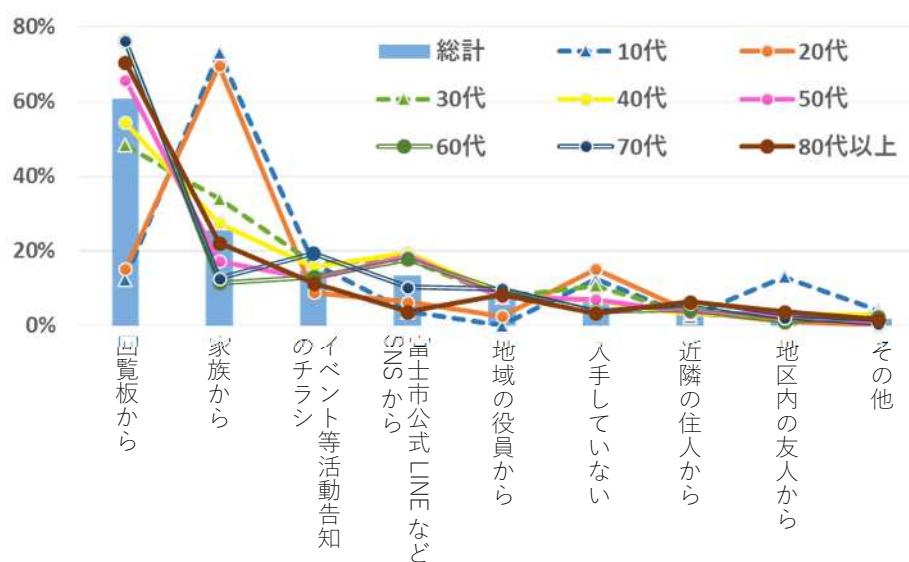
(10) あなたは回覧板を見ていますか？（1つ選択）



(11) デジタル回覧板（スマートフォンのアプリやメールで回覧板情報が確認できる）の導入を今後希望しますか？（1つ選択）



(12) あなたは、まちづくり活動（地区のお祭りや行事、防犯、防災など）の情報をどのように入手していますか？（2つ以内で選択）



回覧板の閲覧状況について、「必ず見ている」「ほとんど見ている」という回答は、年代が上がるにつれて増加する傾向です。反対に10～20代では「ほとんど見ていない」が5割以上を占めます。若年層と高齢層の世代間で、回覧板の認識に大きな差があることがうかがえます。

デジタル回覧板導入への希望については、30～60代は「希望する」「使い方が簡単なら希望する」の回答率が高く、前向きです。一方、70代・80代以上では「希望しない」「わからない」が半数以上を占めており、高齢層でのデジタル回覧板への抵抗感の強さがうかがえます。

特徴的であるのは、10代の「希望しない」「わからない」が過半数を占めていることです。(10)(11)の回答状況と併せてみると、「回覧板」に関心が薄いため、デジタル化への関心も低くなっていると考えられます。

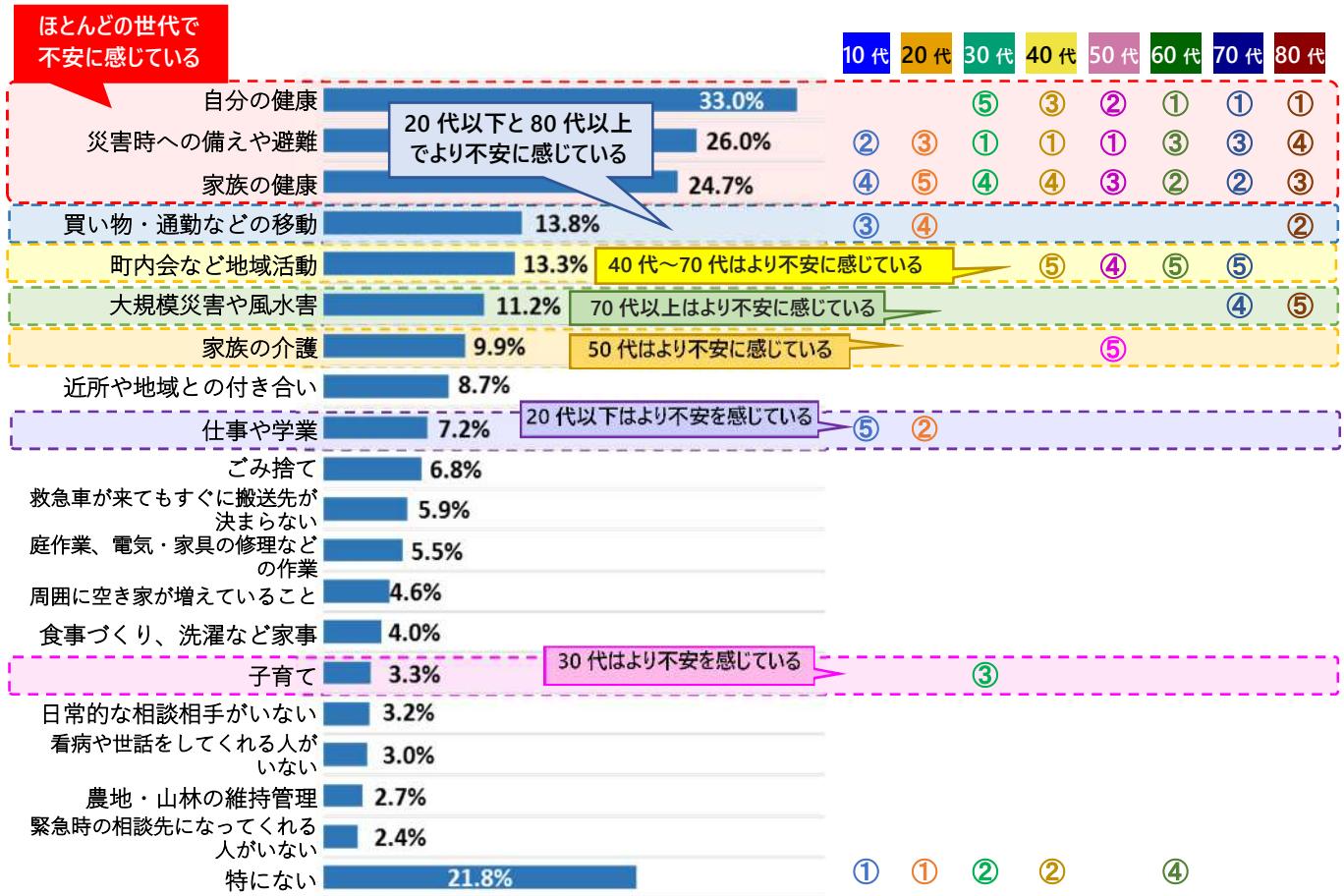
まちづくり活動情報の入手方法については、全体として「回覧板から」が最多です。特に60代以上が突出しています。10～20代は「家族から」が圧倒的です。60代以上の回覧板の依存度が高い一方、若年層は自ら回覧板を見ることが少なく、家族等を介した間接的な情報入手が主流であり、家庭内のコミュニケーションの強さがうかがえます。

また、SNS等デジタル手段による情報入手は、30～50代に広がりつつあります。

暮らし

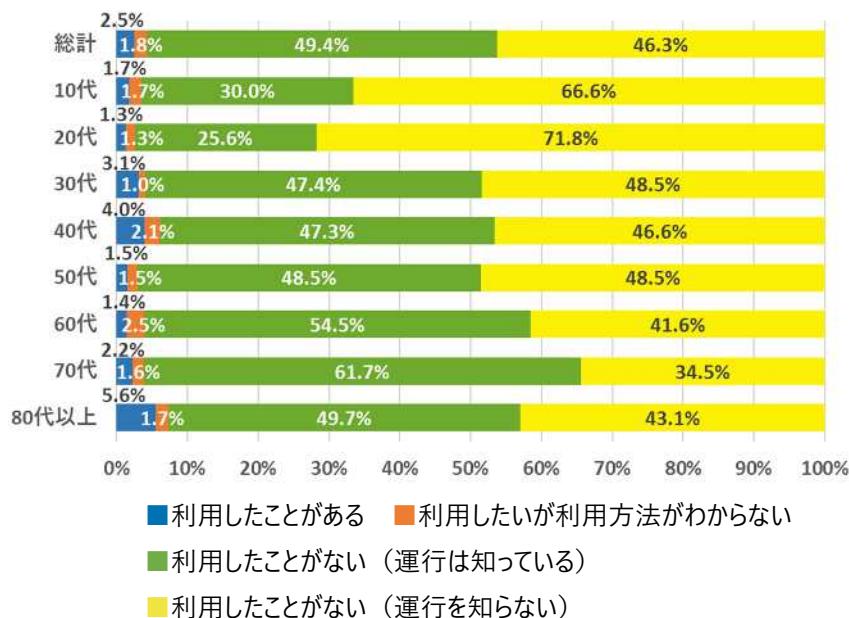
(13)日常生活のなかで、あなたが不安に感じていること、困っていることについて教えてください（複数回答可）

年代別ランキング上位5位



総計では「自分の健康」「災害時への備えや避難」「家族の健康」が上位であり、「緊急時の相談先になってくれる人がいない」が最下位でした。全年代を通じて「健康」「災害時の備え」への不安が強いことがわかります。とくに高齢層になるほど健康への不安が際立ちます。一方で、「特ない」と回答した人も21.8%と多く、不安や困りごとを感じていない人も相当数存在しています。

(14)伝法地区を運行しているA+オンデマンドバス「のるーとふじ」についてお聞きします。（1つ選択）



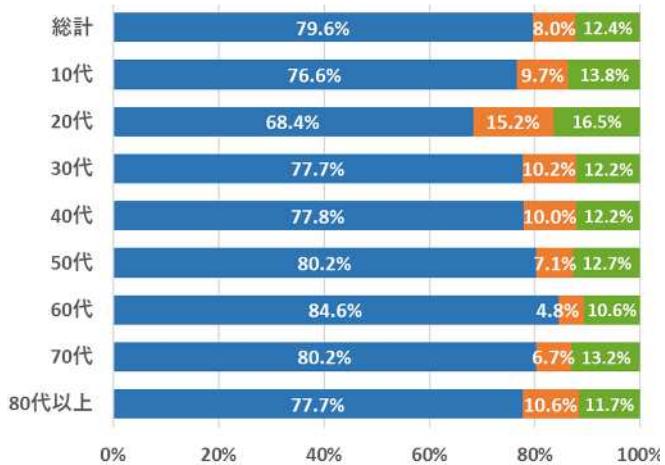
「利用したことがない（運行は知っている）」の回答が最も多く、「利用したことがある」、「利用したいが利用方法がわからない」の回答は非常に少ない結果となりました。

80代以上で利用が最も多く、40代、30代でも相対的に利用率が高い状況です。

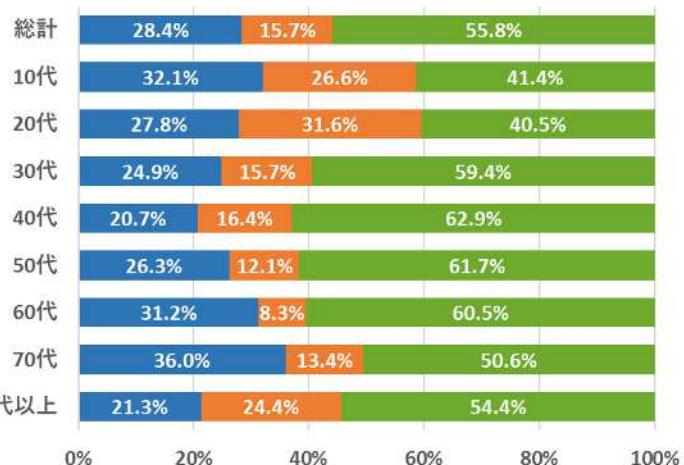
「利用したいが利用方法がわからない」の回答はほとんどの年代で2%以下であり、「利用方法」の認知不足よりも運行自体の認知不足や「利用機会の欠如」が主な課題と見受けられます。

防災

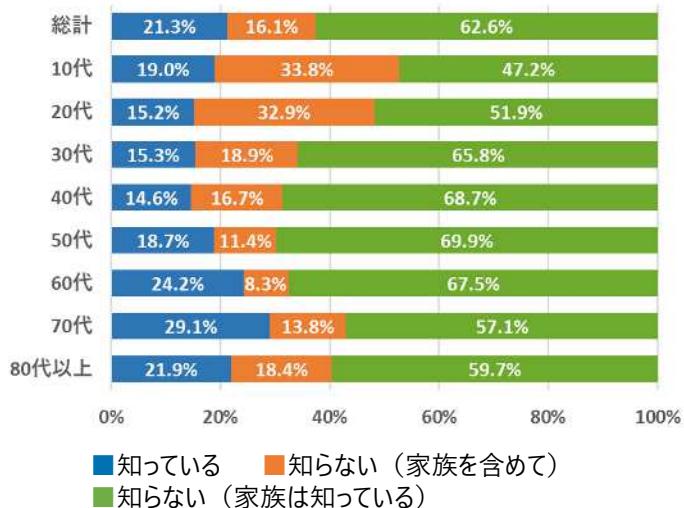
(15)伝法小学校、吉原第一中学校に避難所が開設されることを知っていますか。(1つ選択)



(16)避難所の運営形態は避難してきた方が自主的に運営することを知っていますか。(1つ選択)



(17)避難所は、避難してきた方が自主的に運営できるようになるまで、各町内会から選出された避難所運営委員及び支援要員がサポートする体制になっていることを知っていますか。(1つ選択)



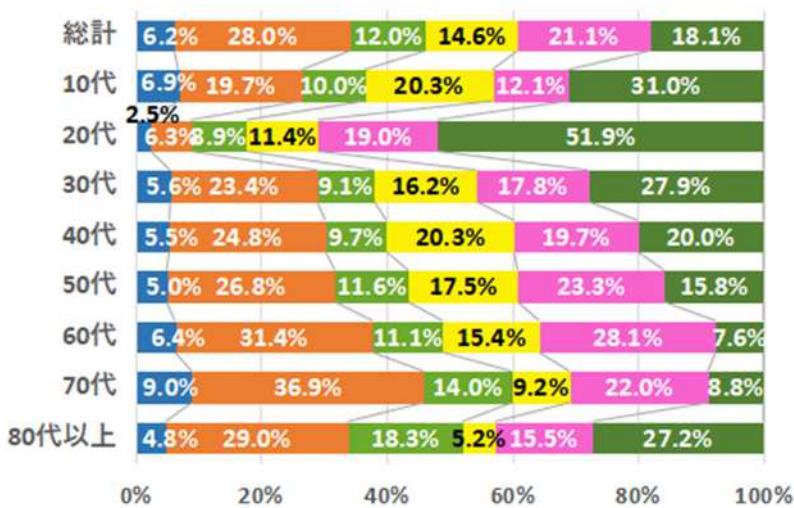
避難所開設の認知度はどの世代でも高くなっていますが、避難所の自主運営については認知度が極端に低くなり、サポート体制についてはさらに低くなります。

特に若年層ほど「知らない」割合が高くなっています。地域全体における意識醸成や、避難所運営の体制に対する具体的な広報・周知活動が急務と考えられます。

災害時の適切な避難を実現するためには、開設場所・運営形態・サポート体制など、避難所の役割や仕組みについて、子どもから高齢者まで幅広く周知し、住民が自ら動ける体制づくりが求められます。

町内会活動

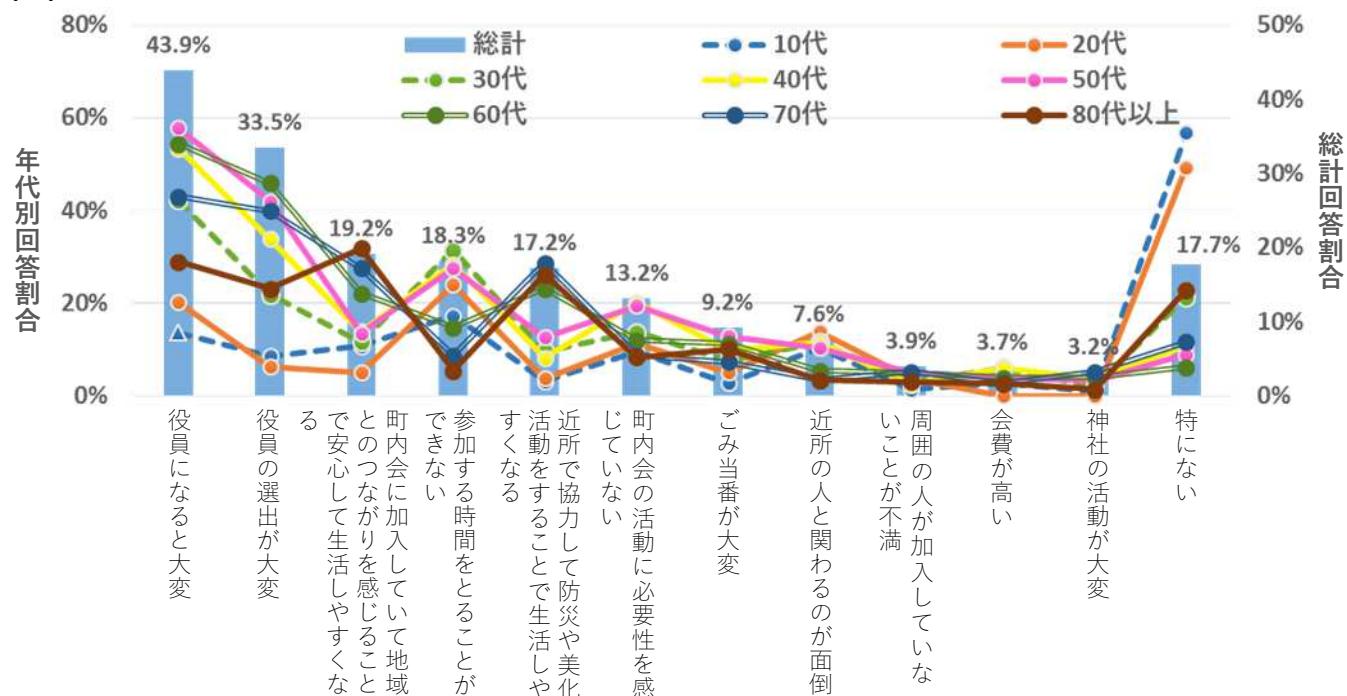
(18)あなたは町内会の活動について、どの程度参加されているのか教えてください (1つ選択)



総計で最も多かったのは「行事のときだけ参加している」であり、全体として行事や頼まれた時など一時的な参加が多く、持続的な参加は少数にとどまっています。若年層ほど消極的な回答が多く、特に20代は「参加していない」が過半数を占めています。

一方、60~70代を中心とした高齢層では、町内会活動への積極的な参加率が相対的に高いことから、活動の担い手は高齢層が中心となっている実態が見て取れます。しかし、80代以上では再び「参加していない」割合が高くなっています。年齢とともに参加が難しくなる現状もうかがえます。

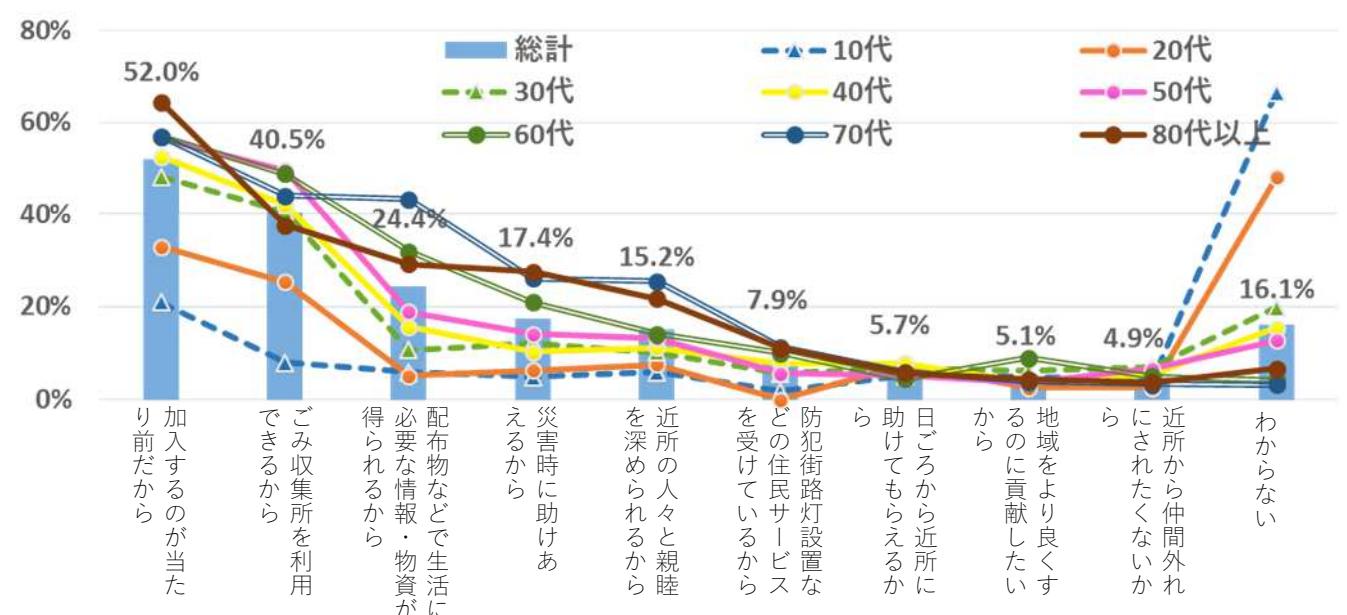
(19)町内会の活動について感じていることは何かありますか。（3つ以内で選択）



全体的に最も多かった回答は「役員になると大変」で、特に40～60代で突出しており、自分が役員を担う可能性を認識するとともにその業務に負担を感じていることがうかがえます。一方で、「地域とのつながりを感じると安心して生活しやすくなる」や「近所で協力することで生活しやすくなる」といった肯定的な意見も高齢層で高くなっています。

10～20代は「特にない」と回答した割合が非常に高く、町内会活動への関心自体が低いことが読み取れます。

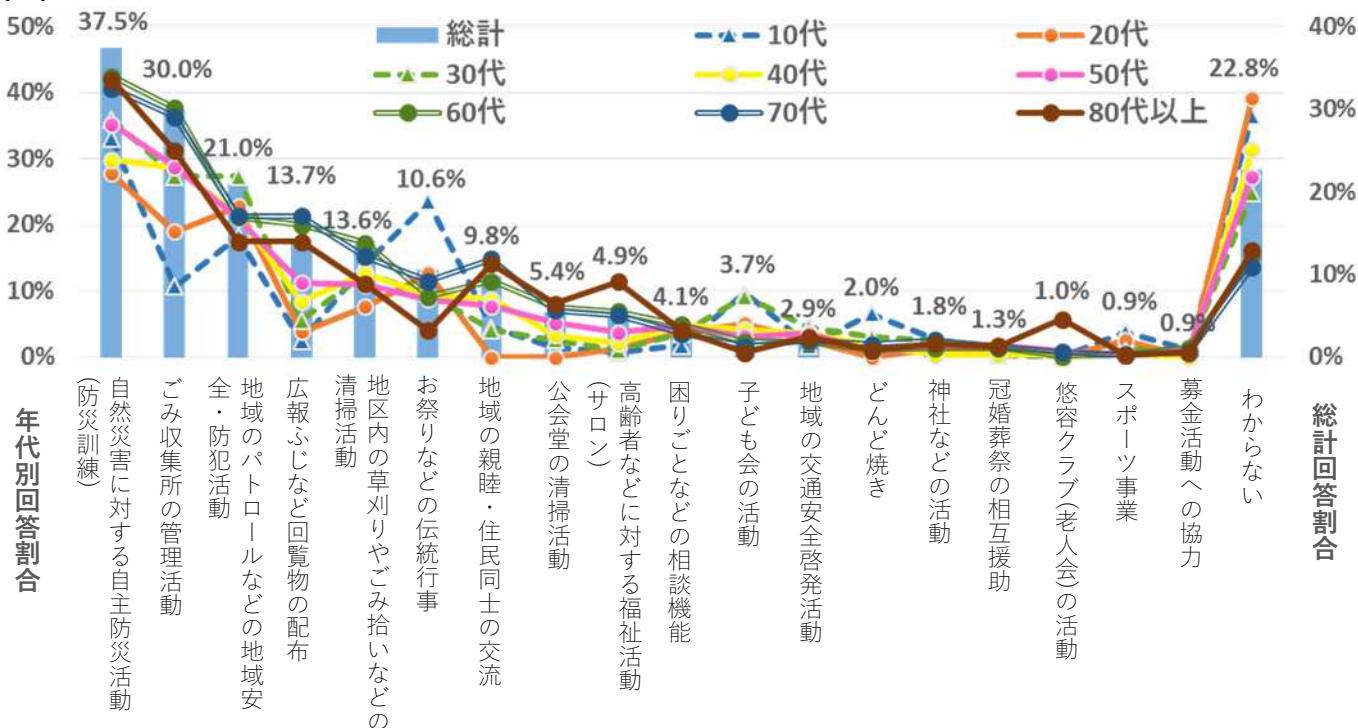
(20)あなたの世帯が町内会に加入している理由は何ですか。（3つ以内で選択）



「加入するのが当たり前だから」が最も多く、町内会加入が慣習化していることがわかります。「近所から仲間外れにされたくないから」は最も選択が少なく、消極的・負の動機での加入はあまり見られません。

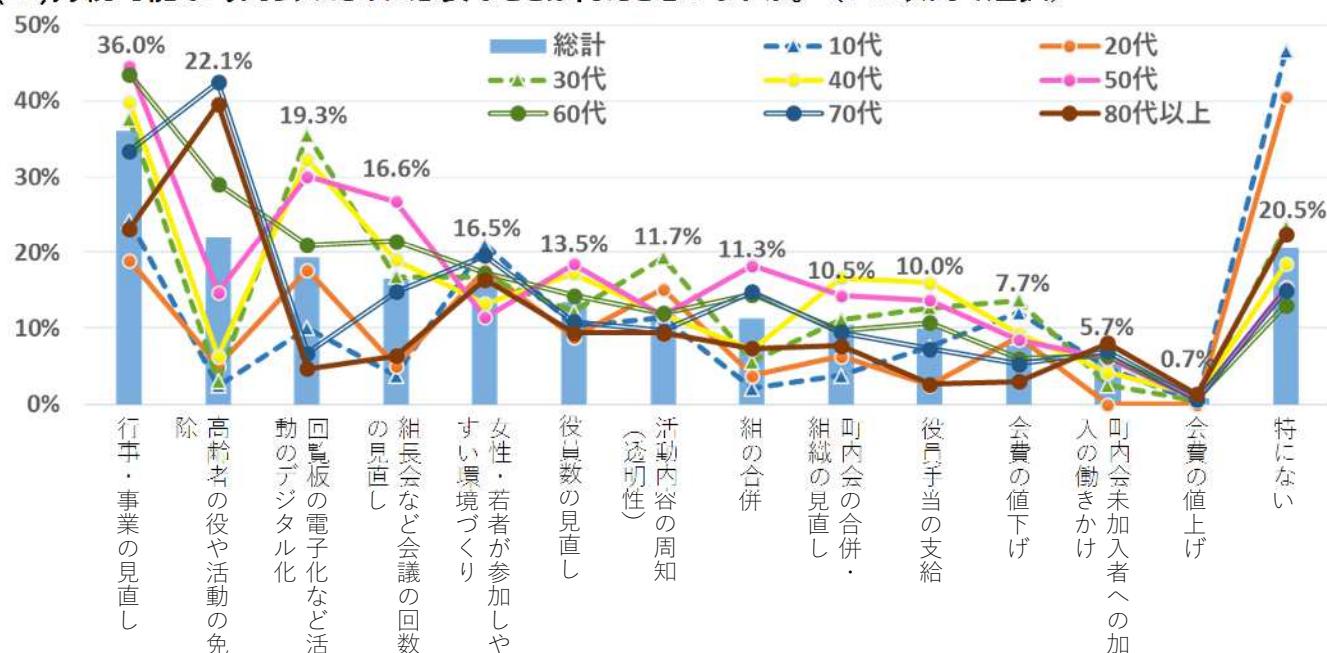
10～20代は「わからない」の回答が目立ち、町内会加入理由への認識が低いことが示唆されます。30～60代は「ごみ収集所を利用できるから」の回答が多く、生活インフラに関する動機が強いことがうかがえます。70代以上では、「災害時に助けられるから」「近所の人々と親睦を深められるから」など、コミュニティ的側面の回答が増加しています。高齢層は町内会を生活の安全ネットや地域ネットワークの一部と認識している傾向が強く、防災や親睦、助け合いなど「つながり」を意識した理由が多いことが特徴です。

(21)町内会の活動で積極的に行うべきことは何ですか。（3つ以内で選択）



すべての世代で、「自然災害に対する自主防災活動」が上位に位置し、地域の安全・危機管理への意識の高さがうかがえます。「ごみ収集所の管理活動」は2番目に多く、30代以上のすべての世代で3位以内に入っています。これらの結果から、町内会に求められている機能は「安心・安全」及び「生活基盤」にあることが読み取れます。

(22)持続可能な町内会のために必要なことは何だと思いますか。（3つ以内で選択）



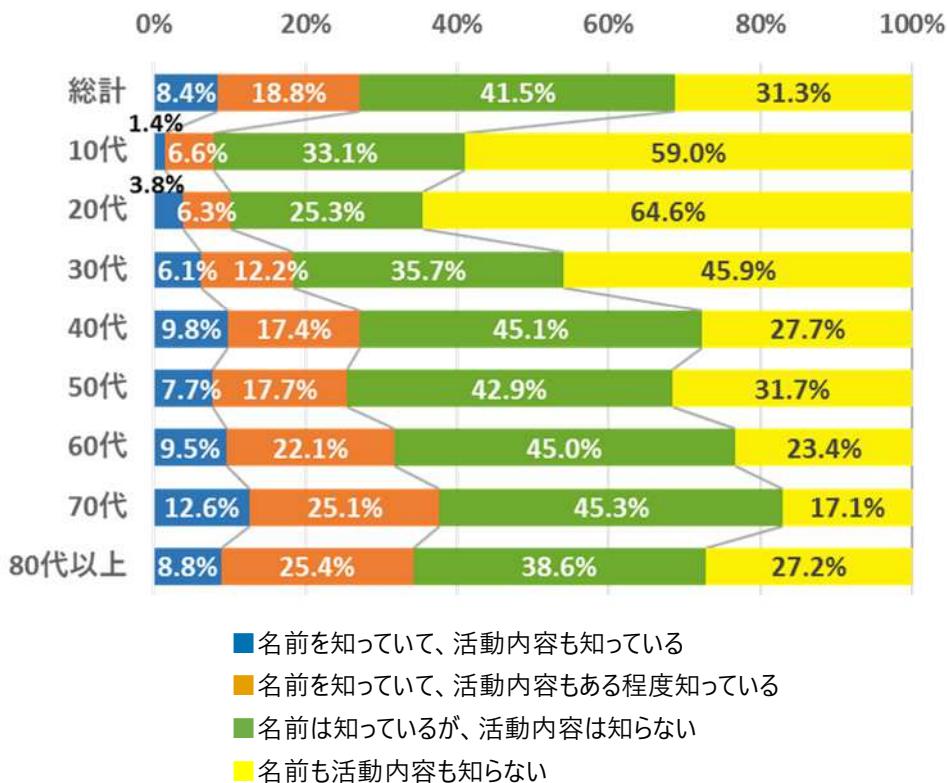
全体として最も多くの回答は「行事・事業の見直し」ですが、世代間でばらつきが見られ、世代ごとに町内会への期待や課題が異なることがうかがえます。10～20代は「特になし」が最も多く、ここでも、町内会に対する関心の薄さがうかがえます。

30～50代は「回覧板の電子化など活動のデジタル化」が1位ないし2位であり、効率化へのニーズが強い世代であると推察されます。「高齢者の役や活動の免除」の回答は60代以降で急増し、70～80代以上で突出して多くなっています。

「会費の値上げ」はすべての世代で最下位でした。「女性・若者が参加しやすい環境づくり」がすべての世代で一定の回答数を得ていることから、多くの住民が、若年層・女性も含めた多様な参加促進策が不可欠であると感じているようです。

地区まちづくり活動

(23)あなたは、伝法地区まちづくり協議会を知っていますか？（1つ選択）



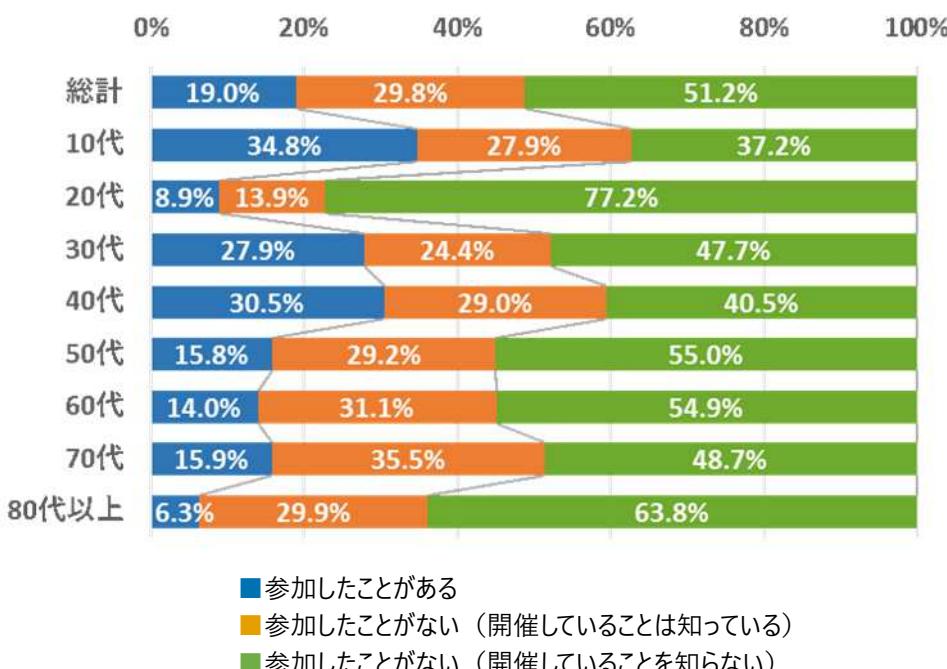
伝法地区まちづくり協議会の認知度について、全体で最も多かった回答は「名前は知っているが、活動内容は知らない」、次いで「名前も活動内容も知らない」であり、「名前を知っていて、活動内容も知っている」「活動内容もある程度知っている」という認知度の高い層は3割弱でした。年代が上がるにつれて「活動内容を知っている」割合が増加し、特に70代の認知度が最も高い現状です。

伝法地区まちづくり協議会が主催する事業への参加状況としては、全体で最も多かったのは「参加したことがない（開催していることを知らない）」、次いで「参加したことがない（開催していることは知っている）」であり、「参加したことがある」と回答した人は約2割にとどまっています。

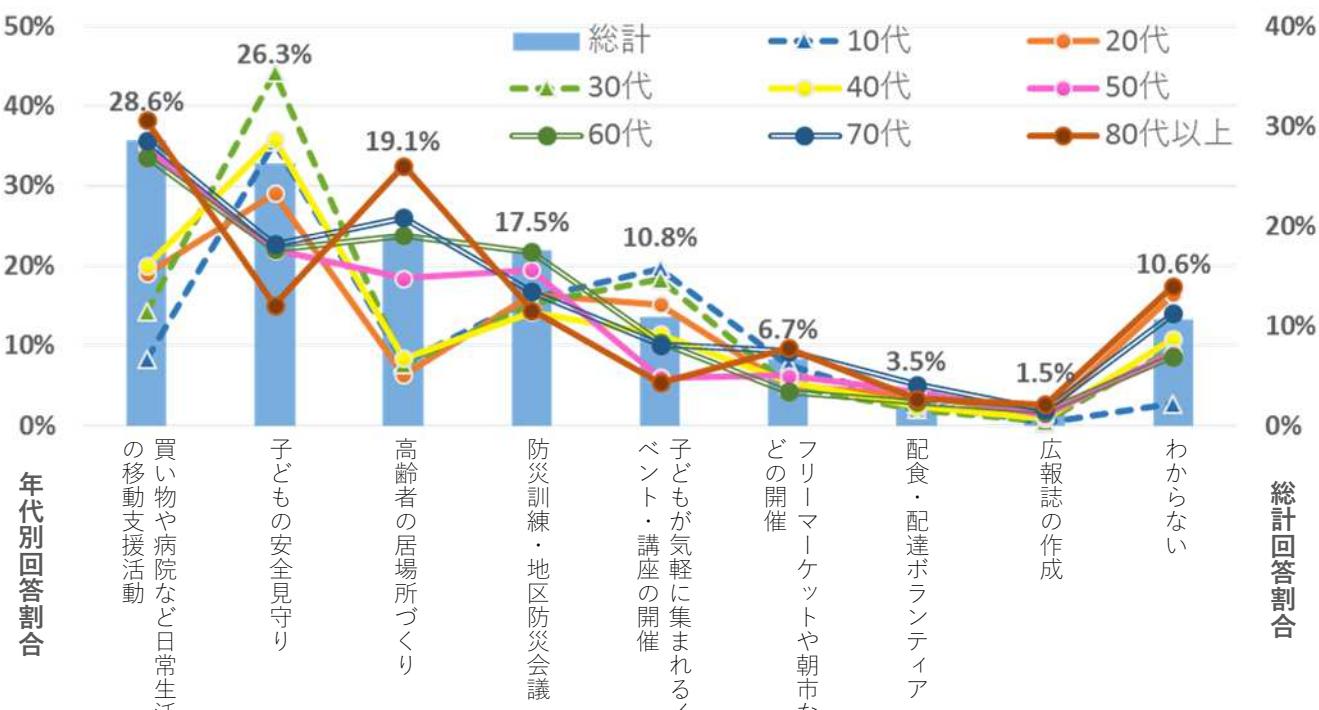
「参加したことがある」割合が最も高いのは、10代で、次いで40代、30代となっており、この世代が実施事業の主な参加者であることが読み取れます。一方で同世代の協議会の名称や活動内容の認知度は低いため、事業への参加には関心があるものの、実施主体への関心・関与は低いことがうかがえます。

とくに20代は事業自体の認知が極めて低く、情報が届いていないことが読み取れます。

(24) 現在、伝法地区まちづくり協議会が地域の活性化のために「伝法わくわくラジオ体操」「わくわくFESTA伝法」「スポーツ+GG」「まちづくり安全推進大会」「わくわく防災キャンプ」など企画、実施している事業のいずれかに参加したことがありますか。（1つ選択）



(25)以下の各項目の地区活動について今後、重要なことは何だと思いますか。（複数回答）

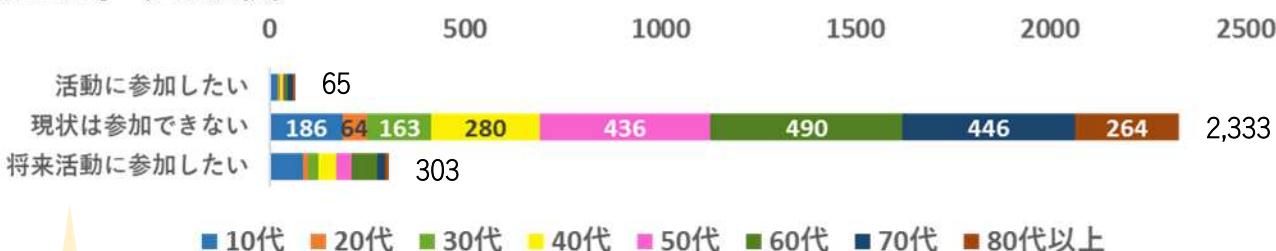


全体として最も回答は「買い物や病院などの移動支援活動」ですが、特に高齢層で突出して多くなっています。次いで「子どもの安全見守り」が10代・30~40代で高い支持を集めました。世代間でばらつきが見られ、世代ごとに地区活動の重要度が異なることがうかがえます。

地区活動に対する住民の関心は、年代による生活課題の違いを反映しています。高齢層では日常生活を安全に維持するための支援や居場所づくりが重要視され、子育て世代では子どもの安全や居場所の確保が強く求められています。

(26) まちづくり協議会の構成団体には消防団や交通安全指導員など伝法地区がより安心安全な町になるため日々重要な活動をしてくれています。しかし、現状は人員が大きく不足しています。そこで、みなさんにお聞きします。（1つ選択）

（単位：人）



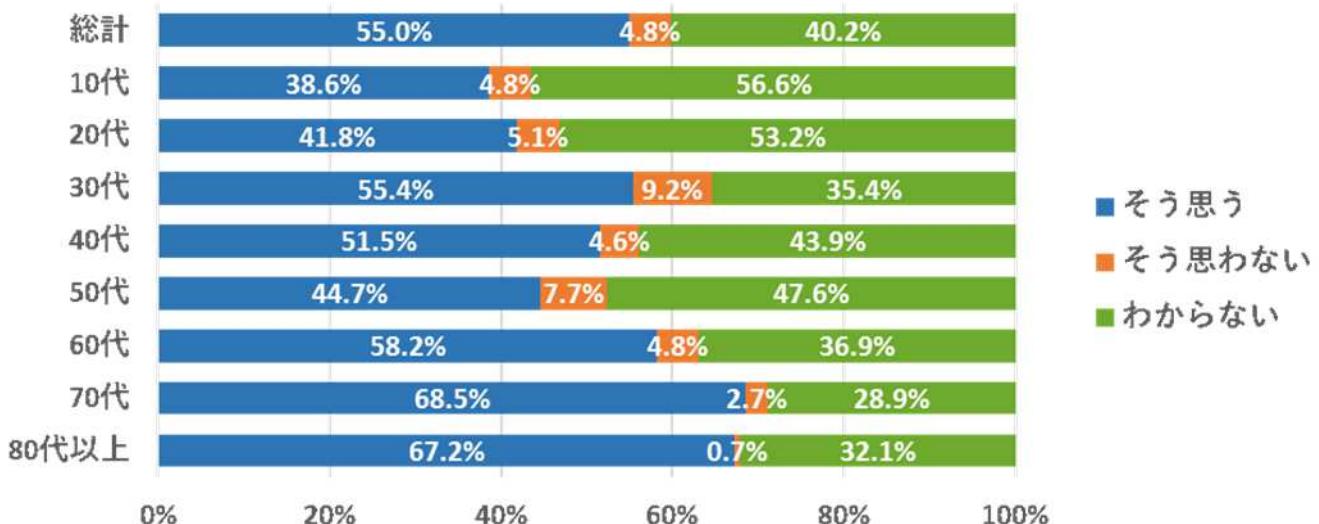
詳細



「現状は参加できない」と答えた方が圧倒的に多い一方で、10代を中心、「将来活動に参加したい」という潜在的な意欲が一定数存在しており、地域活動に対する将来的な関心や期待が見て取れます。

若年層や子育て世代などへの呼びかけや参画機会の柔軟化などを通じて、将来的な担い手の拡大が、今後期待されます。

(27) 未来の子どもたちのため、より良い地域を創るために地域・学校・家庭が三位一体となり協働していくことは大切だと思いますか。（1つ選択）



全体では、「そう思う」の回答率が過半数を超え、「そう思わない」という否定的な回答は少数です。60代以上で「そう思う」と答えた割合が約7割と高い一方で、10～20代では4割程度にとどまっています。

年齢層が高いほど、地域・学校・家庭が協働する意義について共感しやすい傾向が確認できます。これは、地域社会の変化や歴史、子育て・地域活動を経験してきた世代ほど、その重要性を感じていることが背景にあると推察されます。

(28) (27)で「そう思う」と回答した方で、協働していくために必要だと思うこと（自由記述）

あいさつ・声掛け・見守りの推進 地域の大人も子どもも、日常的に挨拶や声かけをすることで、お互いの顔を知り合い、安心・安全な雰囲気を醸成することが重要 / 登下校や放課後の見守り、犯罪や事故から子どもを守る活動が必要

コミュニケーション・交流機会の増加 町内行事、子ども食堂、イベントなど、世代・立場を越えて集まる場や交流の機会を作ることが大切 / 大人も子どもも顔なじみになること、子育て世帯や高齢者が支援し合える場所の確保・提供が望まれる

情報共有・デジタル化 地域・学校・家庭の間で活動内容や子どもの安全情報など、重要な情報を迅速・効率的に共有できる仕組みが必要 / デジタル（IT）を活用した効率的な連絡や周知の要望

参加のしやすさ・負担軽減・仕組みの見直し 共働きや多様な家庭状況に配慮し、無理なく参加できる仕組みを作ること（ボランティア参加、役割の明確化、オンライン活用） / 報酬付き活動や外部委託の導入、役員業務の簡素化

学校との連携・開かれた学校運営 学校の透明化（地域開放や行事参加、情報公開）、積極的な連携 / 教職員だけでなく、地域住民や家庭が協力する体制構築

防犯・安全対策 防犯パトロールや防犯カメラ設置、駆け込み家、交通安全対策など、地域ぐるみで子どもの安全を守る / 災害時・緊急時の協力体制整備

全体協力・思いやり・話し合いの場 子どもを地域全体で見守り育てる意識、協力や思いやり、団結力が大切 / さまざまな立場の人が「できる時にできる範囲」で協力できる体制づくり / 定期的な話し合いや会合、相互理解・意見交換の場

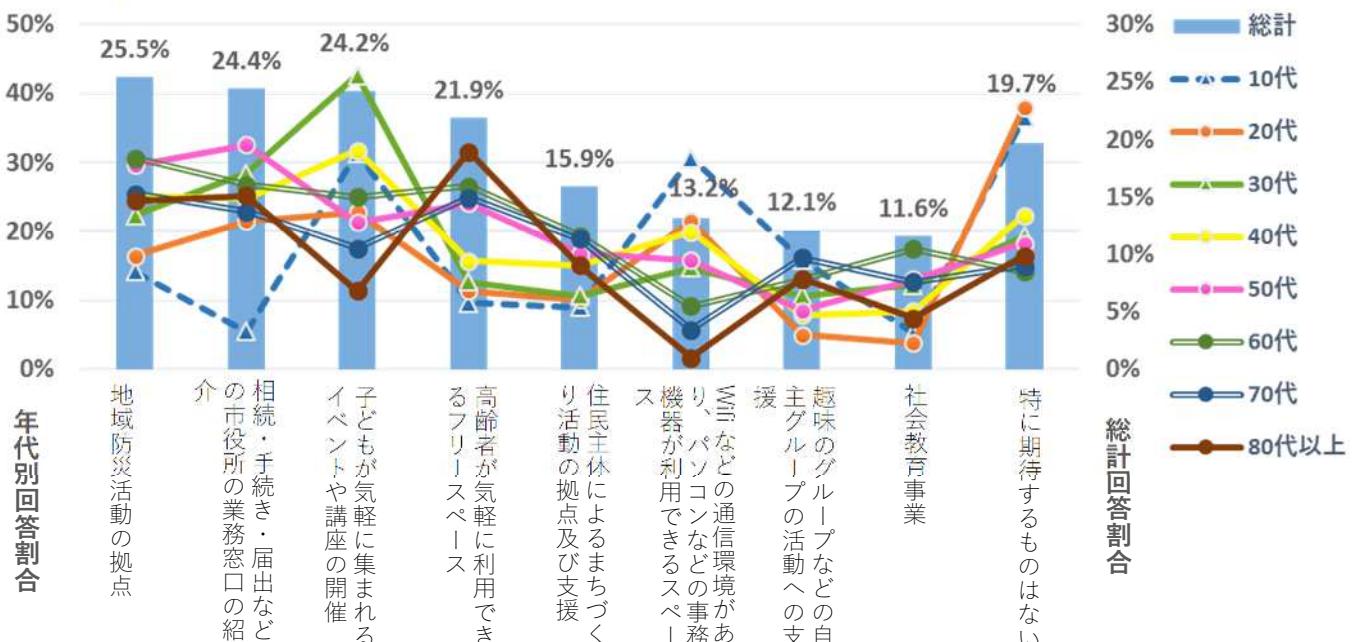
子どもの居場所づくり 部活動廃止や核家族化にともない、放課後や休日に子どもが安心して過ごせる居場所の確保（児童クラブ、公園、学習スペース等）

地域ぐるみの子育てと助け合い シニア世代の協力、子育て世代が参加しやすい仕組み、世代間交流、助け合いの絆を強める重要性

行政の支援・介入の必要性 地域の善意やボランティアだけでは成り立たないので、行政の積極介入や支援が必要

まちづくりセンター

(29) 伝法地区まちづくり活動の拠点として、まちづくりセンターに今後どのような機能が必要だと思いますか。
(複数回答)



全世代で「地域防災活動の拠点」への期待が高いことから、防災・安全に対する意識が地域住民の共通課題であることが見て取れます。若年層や子育て世代では、子ども・若者向けのイベント開催が強く求められており、高齢層はフリースペースなど居場所づくりへの期待が高いと言えます。また、若年層ほど「特に期待するものはない」という消極的な回答が多く、まちづくりセンターの具体的な機能や役割が十分に伝わっていない、もしくは関心が持たれていない可能性が推察されます。

(30) 伝法地区での暮らしやまちづくり活動などについてのご意見・ご要望・ご提案など（自由記述）

道路・交通・安全関連 道路の整備不足（道幅が狭い、舗装の荒れなど）/新築の増加で交通量と危険が増している/車椅子や高齢者の通行困難/横断歩道や信号不足、高齢者・子どもの横断危険/交通安全パトロール強化への要望/無謀な運転や暴走車などへの危機感/街灯・電灯の増設希望/夜間の安全性不足への懸念

防犯・災害関連 防犯カメラ設置要望、不審者情報・犯罪件数増加に対する懸念/災害時の避難誘導、住民の役割分担・運営への不安、行政主導の体制希望/水害・浸水被害が頻発のため河川管理や報告体制、水没対策要望

町内会・自治会活動関連 町内会・役員・班長・組長などの負担が重く、高齢化・持続困難な現状/若い世代や共働き世帯は参加困難、役員の選出・分担への不満/会費・集金制度の不公平感、使用目的・使途への納得感不足/活動内容の見直し、無駄の指摘・簡素化要望、新規住民・転入者との温度差/自動化・デジタル化への要望

ゴミ出し・公衆衛生関連 ゴミ当番廃止・負担軽減、高齢者や働く世帯の対応困難/ゴミ集積所の不足、カラス・不法投棄被害への対策/ゴミ収集所の利用権問題など公平性を問う声/分別徹底、管理強化、回収頻度・場所の改善提案

情報・交流・デジタル化関連 回覧板・広報の電子配布希望、情報量・回数が過多、手間が負担/新規住民、転入者・賃貸世帯、外国人等への情報周知不足、活動内容の説明不足/回覧板を「隣人交流の場」とする意見もあり、アナログとデジタル両方の価値指摘/イベント・活動への周知・予告、参加機会の拡大希望

共助・交流拠点・子育て・高齢者支援関連 公園・児童館・交流スペース・学習スペース・子ども食堂・地域イベント等の拡充希望/高齢者が孤立しない場や多世代交流、県外・転入者へのフォロー/顔の見える仕組み作り

生活利便性関連 スーパー・商店・薬局・日用品店の不足、徒歩やバス等公共交通不便、高齢者の免許返納後対策/移動スーパー、地域交通サービスの充実(バス停数増設・運行時間延長)/医療機関や公共施設の整備希望

地域運営・制度関連 運営方法の効率化、負担軽減/第三者組織導入、NPO法人設立など民間連携への提案